

自閉症スペクトラム障害者のソーシャルスキルに対する アーティスティックスイミングの影響 —質的研究—

スポーツ医科学研究領域
5023A077-5 吉田 理恵

研究指導教員：岡 浩一郎 教授

序論

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder: ASD) は、社会的相互作用とコミュニケーションの欠陥、および制限された反復的な行動の存在を特徴とする発達障害である (米国精神医学会, 2013)。社会性の問題は、ASD 者の中核症状であり、特に青年期以降になって、対人関係における難しさを感じる場面に多く直面することで、後の不安や抑うつといった症状につながるといわれている (桐山ら, 2014)。近年、ASD 者が抱える広範な社会性の問題に対してソーシャルスキルに焦点を当てた研究が散見される (Viecili et al., 2010)。ソーシャルスキルは、効果的な対人コミュニケーションに必要である言語的および非言語的行動とされている (Rao et al., 2008)。

また、先行研究では ASD 者の顕著な特徴である社会性の問題に加えて、運動能力の欠陥を報告しており、多様な運動障害が ASD 者のソーシャルスキルの獲得を阻害する可能性が示唆されている (Teitelbaum et al., 1998)。そのため、運動能力の向上やソーシャルスキルの獲得に向けた支援方策の1つとして、スポーツを通じた介入が期待されている。Bahrami ら (2016) は、ASD の子どものコミュニケーション障害に対する空手の技術トレーニングの効果について検証し、子どものコミュニケーションスキルの大幅な改善を報告した。このように、身体運動やスポーツトレーニングを行うことの有益な効果が実証されており、ASD の子どもに対する早期介入研究が散見される。

近年、ASD の子どもに対するソーシャルスキル向上を目的とした研究や治療への関心が高まっているにもかかわらず、ASD を有する成人に対する関心は著しく低い。ソーシャルスキルの不足は、就業を妨げる障壁となりやすいなど (Tse et al., 2007)、ASD 者に伴う困難は幼少期だけでなく成人期に至るまで影響を及ぼすことが知られている。また、

ASD 者の身体活動は、学校教育期間までにとどまり、学齢期を過ぎた卒後における運動機会は減少する (杉山, 2021)。さらに、ASD 者の余暇活動について、成人期の ASD 者が余暇の時間に行っている体を動かさない座位中心的な活動においても、必ずしも内発的に動機づけられた活動ではなく、他に選択肢がないために行う可能性が指摘されている (杉山, 2021)。このような現状からも、ASD を有する成人に対する運動機会の提供、新たな運動様式の提案は重要である。

そこで、本研究では、ASD を有する成人に対するソーシャルスキル獲得に向けた新たな運動様式として、水中運動であるアーティスティックスイミング (AS) に着目した。アーティスティックスイミングは、水の中で音楽と泳者相互の同時性を基にした評定競技である (市橋, 2014)。アーティスティックスイミングに類似した運動様式としてハリウィック水泳を用いた研究のレビューでは、ASD 者の社会的 (対人行動・自己に関する行動・課題に関する行動) および行動的 (常同・反復行動) 側面の治療におけるアプローチの有用性が確認された (Mortimer et al., 2014)。同じく協調運動という点で類似した特徴を持つダンスを用いた先行研究では、協調運動により ASD 者のコミュニケーションスキルの向上が報告されている (Morris et al., 2023)。このように、アーティスティックスイミングと類似した運動様式である水中運動やダンスを用いた ASD 者の社会性に関する研究が散見されている。アーティスティックスイミングは、指導者のしぐさを模倣し、チームメイトと同調する (シンクロ動作) という過程を経て、1つの演技が完成する。Iacoboni (2011) は、他者の言動を模倣する機能を持つミラーニューロンの活動不全が ASD 者の主な障害であり、模倣に基づいた治療法が ASD 者の社会性の向上に有効だとする仮説を提唱

している。そのため、模倣動作を主としたアーティスティックスイミングが ASD 者にどのような影響を与えるのかについては非常に興味深い点である。しかしながら、水中運動とダンスを組み合わせたアーティスティックスイミングを用いることが ASD を有する成人に与える影響について検討した研究は存在しない。

本研究では、アーティスティックスイミングが ASD を有する成人のソーシャルスキルにどのような影響を与えるのかについて、プログラムに参加している当事者およびプログラムを提供する指導者の視点から質的研究手法を用いて、探索的に明らかにすることを目的とした。

方法

NPO 法人 M が主催するアーティスティックスイミング団体所属者 7 名と当事者の保護者および指導者 3 名を対象として、半構造化インタビューを実施した。初めに、質問紙により対象者の属性および特性を把握した。続いて、インタビューでは、アーティスティックスイミングを通じて得られる変化等について尋ねた。解析にはテーマティック分析を用いた。まず、録音したインタビュー内容を逐語化し逐語録を作成した後、対象者の経験や視点を重視しコードを抽出した。最終的に得られたコードを意味内容ごとに分類し、サブテーマ、テーマを作成した。

結果

当事者のテーマティック分析の結果、28 のコード 14 のサブテーマから、5 つのテーマが抽出された。練習などを通じたチームメイトに対しての感情や行動を示す【対人行動】、アーティスティックスイミングを通じて得られた【自己に対するポジティブな感情】、アーティスティックスイミングにおける隊形変化やシンクロ動作の課題に対しての【論理的行動】、運動能力や水中運動を行うことによる効果を表す【運動能力の向上】、精神状態を好ましい状態に保つスキルを得るなどの【精神的変化】である。指導者の分析の結果、27 のコード、14 のサブテーマ、そして当事者と同様のテーマが 5 つ抽出された。

考察

本研究は、アーティスティックスイミングを実施する ASD 者およびプログラムを提供する指導者

に対して半構造化インタビューによる質的な検討を実施した。その結果、【対人行動】、【自己に対するポジティブな感情】、【論理的行動】といったソーシャルスキルに関するテーマだけでなく、【運動能力の向上】、【精神的変化】といったテーマが抽出された。当事者および指導者、両者の視点において、アーティスティックスイミングの特性である隊形変化、シンクロ動作が ASD 者の【対人行動】、【論理的行動】のきっかけとなっていた。この結果は、Gresham (1986) が定義するソーシャルスキルの中で対人行動および課題に対する行動に関連する。当事者および指導者、両者の視点からアーティスティックスイミングがソーシャルスキル向上に寄与する競技である可能性が考えられる。また、Iacoboni (2011) は、他者の動きにミラーリング（しぐさの模倣）しようとする活動により、互いの感情を通じ合わせる「社会的ミラーリング」を獲得し、その結果として、他者との関わりである「社会的コミュニケーション」が生まれると述べる。アーティスティックスイミングの特性である他者と同調するシンクロ動作、そして、他人に合わせた隊形変化が ASD 者の社会性の向上に影響を及ぼす可能性が考えられる。

また、当事者および指導者、両者の視点から当事者は、チームメイトと完成した作品を大会で披露する場面が多くなり、次第に【自己に対するポジティブな感情】を抱いていた。Gresham (1986) は、ソーシャルスキルの中で、感情の表現など自己に対する行動を挙げている。本研究では、当事者および指導者、両者の視点から【自信を持つ】、【感情を表現する】、【意欲の向上】といったソーシャルスキルに関わる結果が抽出された。アーティスティックスイミングにおける試合など、多くの人の前で注目を集めながら、自分の感情や考えを全身で表現するという経験が自己存在感、自身に対する肯定的な感情に繋がる可能性が示唆された。

結語

5 つのテーマのうち 3 つのテーマ（【対人行動】と【自己に対するポジティブな感情】、【論理的行動】）は、ASD 者のソーシャルスキルに関わる結果だと考えられる。アーティスティックスイミングは、ASD 者のソーシャルスキルに寄与する可能性があり、その有用性がどこにあるのかを本研究から導き出すことができた。